慢性咳嗽患者の季節性とIgE-MASTについての検討

埼玉県立循環器呼吸器病センター呼吸器内科
土方直也、倉島一喜、土屋　裕、高久洋太郎、皆川俊介、山路朋久、原　健一郎、斉藤大雄、
徳永大道、生方幹夫、柳沢　勉、高柳　昇、杉田　裕

【背景、目的】今年は花粉飛散量が多く、花粉症のピークに一致して咳嗽を主訴とする新規患者がしばしばみられた。そこで慢性咳嗽をきたす患者の季節性とIgE抗体のパターンについて検討した。

【方法】慢性咳嗽にて当院を受診したatopic cough 19名、cough variant asthma 25名、について発症月とIgE-MASTの調査を行った。

【結果】アトピー咳では2−5月の発症は58%で、花粉症の時期に一致して多く、咳喘息では2−5月の発症は28%で、春先と秋から初冬に発症が多かった。アトピー咳でIgE-MAST陰性の人は52%、スギ、花粉のみ36%、ダニ優位5%、花粉＝ダニ5%であった。咳喘息でIgE-MAST陰性の人は44%、スギ、花粉のみ35%、ダニ優位12%、花粉＝ダニ4%であった。

【考察】アトピー咳、咳喘息ともIgE-MAST陰性の群が存在するが、検出感度の問題が残る。また両群とも喘息と比較してスギ花粉に対するIgE抗体が多くダニ抗体の頻度は低かった。特にアトピー咳ではH1拮抗薬が有効で、発症時期とも合わせ花粉症と共通した特徴をもつ一群があると思われた。